



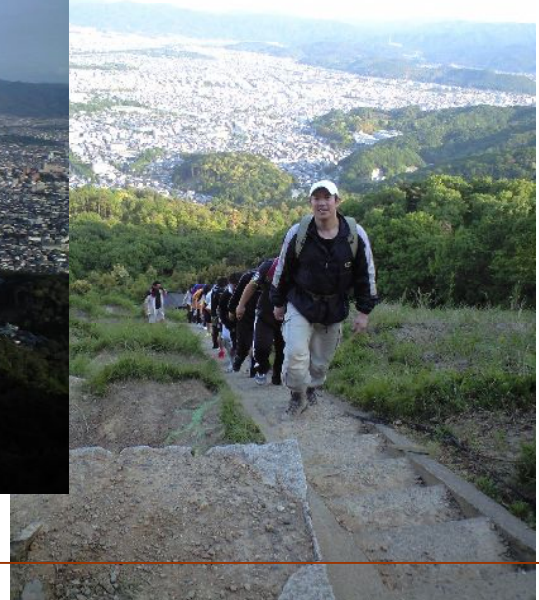
～礼儀と節度を考える～

平成武師道

〈人間活動学〉



大文字山から見た京都市 : 2009年5月15日



先日、「壬生義士伝」なる映画を観た。
幕末の京都の壬生で出来た新撰組についての映画である。
主人公は中井貴一演じる吉村貫一郎。
盛岡の南部藩出身で外見と違い、かなり腕の立つ男。
しかし、何かにつけ金に執着し“守銭奴”扱いされるのだが、実はこれには理由があり、家族に仕送りをするためだったのだ。
東北は飢饉に苦しみ、下級武士にすぎなかった貫一郎はやむなく脱藩してまで新撰組に流れてきたのだ。
新撰組が分裂したときの事。
伊東派が薩摩と組むために離脱をすることになり、貫一郎は伊東に誘われる。
禄は倍に出すという申し出にも関わらず、貫一郎はここできっぱりと断ったのだ。
脱藩で一度は裏切った“義”を二度は裏切れないと。
その後、新撰組は京都守護も解任され、大政奉還が成り、機能は止まってしまった。
それでも最後の“義”を貫くため貫一郎は戦い抜くのであった。
私はこの映画を観て思った。
武士は金の事を言うのは汚いとしているが、守るための者がいるための金は大変美しいものに見えた。
また“義”の為に己の心を守る事もあれば、捨てる事もできる。
どのタイミングで“義”を貫き通すのか。
私自身も平成の選択肢の多い時代に、いつ自分の命を賭してまで貫ける“義”を見つけ、達成できるのだろうか。
現時点では、数十名の武師道会員に私は助けてもらっている。
だからこそ平成武師道の“義”を達成する行動で、受けた恩の倍は返す覚悟でいる。
恩人を裏切らず、己の心も裏切らず、同志を一生の友として強く生きていこうと壬生義士伝を観てさらに思うのだ。



佐々木